



## 激動の幕末・明治維新史科

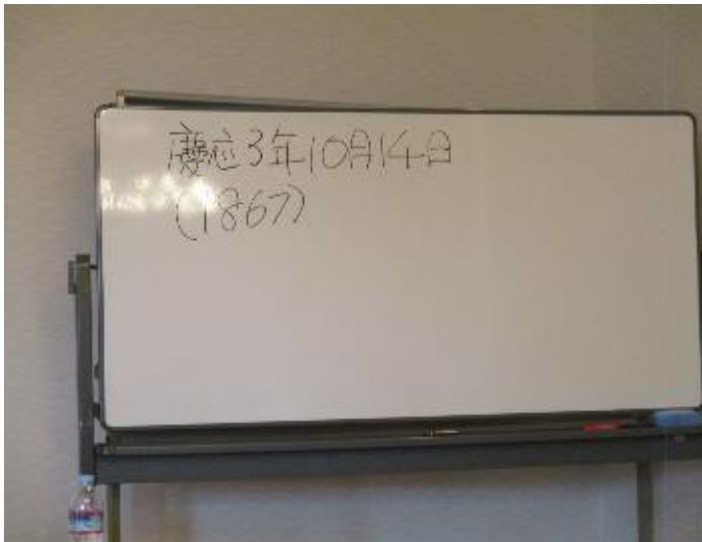
### 第15回 講義 大政奉還と王政復古 (中村先生)

この写真は10月16日、蛭池の麻田花笠太鼓祭を撮影

3班広報担当 2022年10月25日

特別講座激動の幕末・明治維新史科の第15回講義が10月25日(火)開催されました。入口でいつも通り、マスク着用・確認・検温・手消毒を受けました。

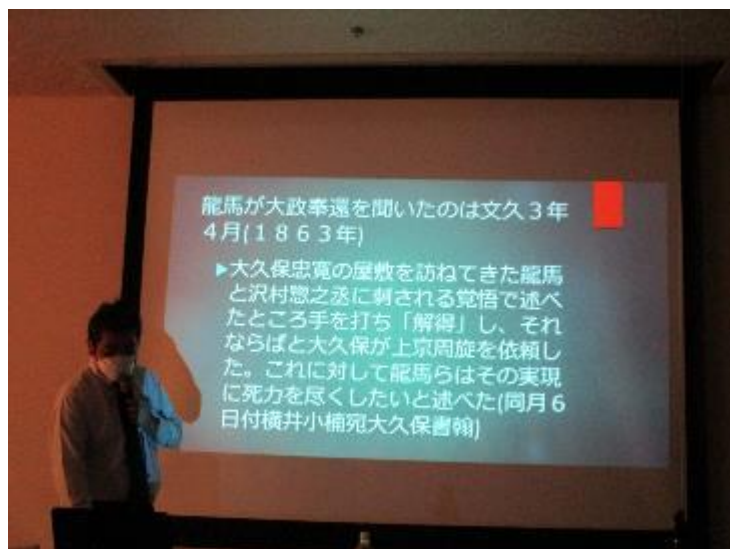
- ・講義は今回を含めて、あと2回です。講義のレジメ(王政復古・鳥羽伏見戦争)を頂きました。大政奉還の続きを講義された。今日は慶応3年10月14日(1867)からです
- 1. 二条城で行われたのは虚構。その説明は随時された。大政奉還は坂本龍馬でなく実は他人の説。龍馬が大政奉還を聞いたのは文久3年(1863年)大久保忠寛の屋敷だった。
- 2. 10月3日、土佐山内家が将軍慶喜に大政奉還など建白。4日後藤象二郎ら土佐重臣が会津公用方(小野権之丞・外島機兵衛ら4人)に前日の建白を伝える。寺村左膳「会津には意外なものと推察。しかしとくに異論なし」。6日、広島浅野家も将軍慶喜に大政奉還など建白。8日、会津容保が二条城登城。原市之進の死(8月14日)を受け、老中板倉勝静・永井尚志が容保の身を案じていると慶喜が述べ、新選組に警護させたいと沙汰ある。9日、会津公用方が近藤勇を呼んでこれを伝える。
- 3. 13日四ツ半に二条登城を命ず。12日卯刻(午前6時)ごろ以後、二条城に守護職、所司代、大目付、目付、禁裏付、町奉行などの公辺役々が惣登城。慶喜から大政奉還の意志を伝えられる。同日、「今朝も象二郎永井へ出ル、弥以御建白御採用ト決定」(神山日記)13日、紀州・尾張・加賀・阿波・仙台・薩摩・土佐・安芸・備前・宇和島など50人ほどが八ツ時まで集合。大目付戸川伊豆守安愛が諸侯宛の書付を渡す。重役らにもみせる。老中板倉勝静が言上希望者を問う。薩摩家老小松帯刀、土佐参政後藤象二郎・福岡藤次、安芸家老辻将曹、備前牧野権六郎、宇和島都築莊蔵が希望。いったん控室に下がる。あらためて6人以外が大広間に。主君宛の書付が渡され、上洛が命じられる。6人広間へ。
- 4. 小松がそばの板倉にすみやかな朝廷の奏聞を力説。小松・福岡ら摂政に二条斉敬を訪ね、すみやかな上表の受理を求む。14日、慶喜が二条摂政へ大政奉還建白書を差し出す。受理。15日参内。大政奉還勅許。
- 5. 森鷗外「西周伝」によれば、13日夕方(小松らが去ったあと)、「大広間の廊下に障子屏風を環らし、慶喜其中に坐して周を延き、国家三権の分別及英吉利議員の制度等を問うた。「略ぼ梗概を陳べて退き、その詳なることをば、燈下に手記し、西洋官制略考と題して、翌日これを上りぬ」。「一日又旨を若年寄永井尚志に伝へて、周に英文簡牘を作らしむ」(『鷗外全集』著作篇9巻、58頁)。
- 6. 慶喜としては、まだ年若い明治天皇(当時数え16歳)を戴く朝廷に政権担当能力はなく、やがて組織されるであろう諸侯会議で自らが議長もしくは有力議員となるなどの手段で、政治的影響力を行使できるだろうという目論見の上での政権返上であった。
- 7. 18日付、望月清平宛、坂本龍馬書簡。これを読むと龍馬が死ぬ気がないことがわかる。24日、慶喜将軍辞職提出、保留。11月11日近藤勇が江戸の松本良順に宛てて援兵要請。
- 8. 10月16日、17日大久保利通宛岩倉具視書翰で小松帯刀、西郷隆盛、大久保利通3名は会津に狙われているので、帰国するように。会津の史料でも確認。この結果11月15日に坂本龍馬と中岡慎太郎が襲われ死亡。



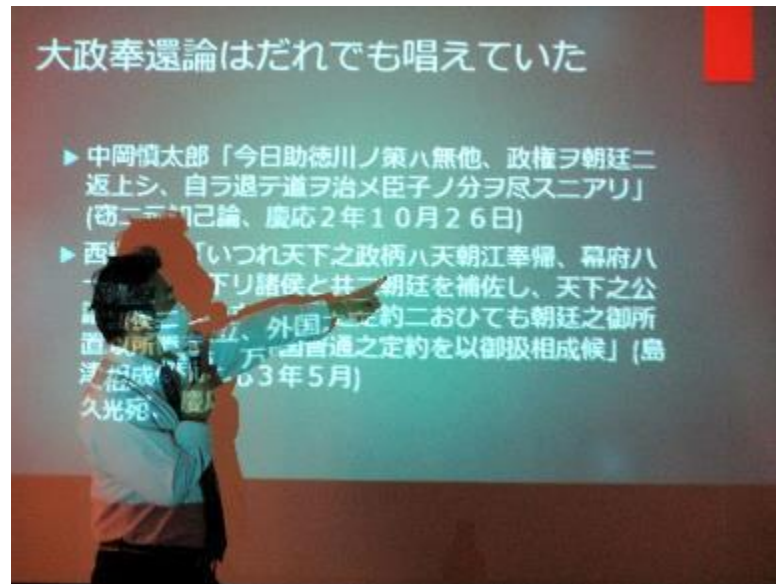
今日の講義「大政奉還」の説明



大政奉還は実は他人の説明



龍馬が大政奉還を聞いたのは  
文久3年(1863年)大久保忠寛の屋敷



大政奉還論はだれでも唱えていたが  
できない  
そのために討幕に移った